第 10 回日本内視鏡学会北海道地方会抄録

◇ 日時／昭和 40 年 7 月 11 日（日）
◇ 会場／田辺製薬株式会社　6 階ホール

1.　胃集検（間接レ線及び胃カメラ同時併用）
　に於ける Gascon-B-Drop（試作）の使用経験
　　札幌北農病院　飯塚徳男・○岡　豊・村島義男
　　山寺泰彦・前沢貢
　　北大高杉内科　並木正義・小松徹弥・小池章之

2.　胃集検にて発見された比較的早期胃癌の 2 例
　　札幌医大癌研　井林　淳・漆崎一朗

3.　柿胃石症の一例
　　北大山田内科　田　村　浩　一

4.　胃良性潰瘍の 3 症例
　　札幌医科大学内科学第一講座
　　（指導和田武雄教授）
　　池下照彦・秋川恵二・前田　貢・近藤文衛
　　佐藤勝己

5.　胃ポリープ経験例
　　札幌逓信病院　内科　高　須　重　家

6.　腺状潰瘍の症例
　　札幌北農病院　飯塚徳男・前田　晃
　　岡　　豊○村島義男
　　北大第三内科　並木正義・小池章之
　　小松徹弥

7.　Menetrier 氏病の症例
　　札幌北農病院
　　外科　前田　晃　○植林実朗・田嶋邦好
　　内科　村島義男・前沢　貢
　　北大高杉内科　並木正義・松島喬

第10回日本内視鏡学会北海道地方会抄録

◇ 日時／昭和40年7月11日（日）

◇ 会場／田辺製薬株式会社　6階ホール

1. 胃集検（間接レ線及び胃カメラ同時併用）に於ける Gascon-B-Drop（試作）の使用経験

札幌北農病院　飯塚徳男・○岡　豊・村島義男
山寺泰彦・前沢貢
北大高杉内科　並木正義・小松徹弥・小池章之

胃集検の Filter として，胃カメラ，胃間接レ線同時併用の際，胃カメラ前処置としての，Gascon-B-Drop（以下 G-B-D と略す）の有用性については一部発表済である。今回我々は，某事業所事務職員372名につき両者同時併用，このうち，187名に G-B-D 内服，185名に Finalin 注を使用し，胃間接レ線像及胃カメラ像に及ぼす影響を比較した。なお同時併用群の要精検率は，20.2%であり，この一次 Filter による発見疾患は，胃癌1例胃ポリープ3例，胃潰瘍8例，切除胃3例，十二指腸潰瘍4例，慢性胃炎84例で，胃癌及胃ポリープの全例，胃潰瘍の7例及び胃炎の全例は，胃カメラによる発見である。胃 Tonus の低下による，間接レ線像の空気量過剰・十二指腸球部及球部以下の充盈陰性，胃下垂（II度）の頻度を G-B-D 群と Finalin 群とで比較し，各項目とも G-B-D 群が，Finalin 群の½乃至⅓に減少することを認め，又胃カメラ判読不能コマ数平均，判読不能例数は，両群同じく，幽門可視率，胃角可視率は G-B-D 群が良好な事を認めた。又，G-B-Dは注射の繁雑，疼痛もなく，胃カメラ前処置として，種々の観点から優れている事を論した。

2. 胃集検にて発見された比較的早期胃癌の2例

札幌医大癌研　井林　淳・漆崎一朗

昭和38年よりおこなわれている胃集検（対癌協会）において精密検査を以要とした患者中，多発性ポリープにみられた初期癌の1例と，臨床的に，比較的早期胃癌と思われた1例についてその内視鏡像をはじめとして供覧する。

症例1は59才女子例であり多数の胃ポリープを有し，一部に grade 1 の初期癌および Carcinoma in situ の組織変化をみた。本症を中心に，ポリープの悪性化に関して従来の文献を中心に考按する。さらにまた多発癌という従来種々論議されていた点につき Warren, Moertel らの綜説，さらに本邦諸家の報告を中心に報告したい。

症例2は57才男子例で自覚症状のほとんどみられない時期において，胃幽門癌があり，胃レ線検査では，背臥位に際してのみ陰影欠損像を証明した点，また本腫瘍は粘膜下層迄の腫瘍浸潤であり乍ら，附属淋巴腺転移のあった点，以上から胃集団検診における早期診断の益々必要な点等につき述べる。

3. 柿胃石症の一例

北大山田内科　田　村　浩　一

北海道では極めて稀な柿胃石症の一例を経験し，胃カメラ検査により胃石像を捉えたので報告する。患者は18才女子，主訴は悪心，約1.5年前から時折，夜半空腹時に悪心，心離部鈍痛を覚えていたが，昭和39年12月20日スキーより帰ると悪心が起り，朝まで続いたので当科を受診した。嘔吐はなく，他の胃腸症状も訴えない。患者は家族と共に連日甘柿を嗜食し，発病前日にも3個を喰べている。現症に特記することはない。レ線検査で胃は軽度下垂，胃体中央部に鶏卵大の腫瘤状陰影欠損を，前庭部に胡桃大，上部に小指頭大の同様の欠損像を認めたが胃内移動性はなかった。翌日の胃カメラ検査ではレ線像に一致して，白色胃石像を捉えた。これは褐色塊の表面が灰白色の被膜で覆れていることが判り，前日のバリウムが膠着したためと推測した。10日後の再検査では，これらの胃石は全くみられず，自然に消失したと思われる。猶，胃液は過酸であった。

4. 胃良性腫瘍の3症例

札幌医科大学内科学第一講座
（指導和田武雄教授）
池下照彦・秋川恵二・前田　貫・近藤文衛
佐藤勝己

私共は最近3例の胃良性腫瘍を経験した。

第1例は48才の男子。主訴に心窩部痛。右季肋部に鶏卵大の腫瘤を触知。胃X線検査で胃体部後壁に憩室様ニッシェを認め，内視鏡で球状の平滑な巨大腫瘤および憩室を認めた。摘出標本は中央潰瘍状を呈する手掌大の腫瘍で，組織学的に胃平滑筋腫であった。

第2例は61才男子。主訴は皮下溢血点。肝，脾腫を触知。上腹部に抵抗を認む。胃X線で胃角部に陰影欠損，内視鏡で粘膜正常な広基性腫瘤を認む。摘出物は球状の腫瘍で，組織学的に胃平滑筋腫であった。なお，肝硬変症も存した。

第3例は37才男子。主訴は心窩部痛。心窩部に抵抗あり，胃X線で小彎側に陰影欠損を認め，内視鏡で球状の粘膜隆起あるが粘膜は正常。摘出物は小指頭大の腫瘍で，組織学的に Heinrich I 型に層する胃内迷入膵であった

以上の症例を報告し，胃良性腫瘍の2，3の文献的考察を加えた。

5. 胃ポリープ経験例

札幌逓信病院　内科　高　須　重　家

吾々は過去5年間に胃カメラ施行700例中5例に胃ポリープを認めそのうち4例は手術によってポリープを確認した。

これら胃ポリープ例の検査所見を特に胃内視鏡所見を中心に分析し，胃ポリープ良悪性の鑑別について文献的考察をも加え検討した。

症例1　69才，男性。主訴上腹部膨満感，臨床的にはポリープ癌をうたがい組織所見上 papilloma と癌は否定的であったが，なお核の異型性の見解から粘膜内癌の可能性をも考えられる一例であった。

症例2　61才，女性。主訴上腹部膨満感。

症例3　56才，女性。主訴上腹部痛

共に数年前の胃レ線，胃カメラ検査ではポリープを認めず，萎縮性胃炎として経過観察中に発見した例で慢性胃炎に続発せる胃ポリープの実例として興味ある症例である。

症例4　49才，女性。主訴上腹部膨満感。

手術前，胃生検を行ない，腸上皮化生性変化を著明に認め，癌発生母地として胃炎の推移を考える時，大いに示さに富んだ症例である。

症例5　67才，女性。主訴右季肋部圧迫感。

胃ポリープに胆石症の合併した例である。

症例2以下は全て，良性の粘膜ポリープであり，内視鏡でのポリープ良悪性の判定は癌センター崎田等の言う規準にほぼ一致していた。

6. 腺状潰瘍の症例

札幌北農病院　飯塚徳男・前田　晃
岡　豊○村島義男
北大第三内科　並木正義・小池章之
小松徹弥

最近，特に経験した線状潰瘍の症例について報告する。

症例1　38才，男子。レ線で嚢状胃，GC（ガストロカメラ）で胃角部の線状潰瘍。切除胃で長さ 4.5cm，幽門から（pū）2cmで ul4 の線状潰瘍。

症例2　45才，男子。レ線で嚢状胃，GTF で線状潰瘍を認む。切除胃で長さ15cm，pū 1cmの ul4 の線状潰瘍。

症例3　61才男子。レ線で嚢状胃，GC で胃角部に線状潰瘍。切除胃で長さ6cm，pū 5cm の ul4 の線状潰瘍

症例4　62才，男子。レ線及びGTF で線状溝を認めた。切除胃で長さ4cm，pū 8cmの ul4 の線状潰瘍

症例5　43才，男子。レ線で小彎短縮，GC で胃角部線状潰瘍。切除胃で長さ4cm，pū 8cmの，ul3 所々 ul4 の線状潰瘍。其の他内科的に経過をみている5例を示した。これらは，いづれも，長期間胃の愁訴を訴え，再発再燃を繰り返した難治性胃潰瘍の例であった。

7. Menetrier 氏病の症例

札幌北農病院
外科　前田　晃　○植林実朗・田嶋邦好
内科　村島義男・前沢　貢
北大高杉内科　並木正義・松島喬

われわれは，この3年間に3例の Menetrier 氏病（2例は手術，1例は非手術例）を経験したので報告した。

症例1　51才の男で，自覚症状とくになく，1年前胃集検で胃癌を指摘され，精検により本症を疑い胃切除術を行った。症例2，41才の男，4年前より慢性胃炎として加療されていたが，たまたま当院において胃バリウム検査で皺襞の異常をみとめ，ファイバースコープで本症と考へ胃切除術を施行した。症例3，58才の女，胃潰瘍として治療中，低蛋白血症に気ずき，ファイバースコープ及び胃生検から本症と診断した。2例の切除胃は，いずれも大彎側を主体とする異常に肥厚した皺襞を有し，

外観はあたかも大脳回転を思わしめ，病理組織学的にも，本症を考えさす所見をえた。本症の本態はなお不明であるが，今回，慢性胃炎との関連性において，経験例にもとずき，いささか検討を加えた。

追　加

室蘭　日本製鋼所病院　清　水　　貞

Giant rugae の1例を経験したので追加する。症例は37才女，約1ケ年前より全身倦怠，時々発来する心窩部痛を主訴として来院，体格，栄養中等で，血液検査で貧血を示した以外，低蛋白血症なく血清蛋白分画上にも異常がない。胃液検査（カフェイン法）で無酸を示し，又尿潜血反応（＋～＋＋），虫卵（－），レ線検査及び胃カメラで giant ugae を認めたが，悪性腫瘍を否定し得ず胃亜切除の結果，前者であることを確認した組織学的には肥厚性胃炎と診断された。